

## 【講義 6】 装訂・料紙について

松原 哲子

### 一、はじめに

この講義では、古典籍の装訂および料紙について、名称や命名の根拠などを概観した上で、これらが古典籍研究にとってどのような意味を持つのかを示す。また、近世期の版本を例に、現存する古典籍にアプローチして得られるこれらの情報を研究上活用していく上での留意点等についても考えてみたい。

(過去5年の担当教員 落合博志)

### 二、装訂とは

装訂とは、書物の外側のデザインを意味する言葉である。日本の古典籍においては、主として資料が巻物か、それとも冊子本かといった、どんな外形のものとして存在しているのかを指すものである。

かんすぼん つぎがみ  
卷子本・継紙

おりほん おりじょう  
折本・折帖

でっちょうそう れっちょうそう たんようそう ふくろとじ  
粘葉装・列帖装・単葉装・袋綴

また、製本方法だけでなく、表紙の色・素材・文様や、それに貼付された<sup>だいせん</sup>題簽の様式等のあり方等も含めた情報もまた装訂を構成する要素である。個々の古典籍を評価する上で装訂から得られる情報は、資料の製作年代や生産地、内容や使用目的を見極める上での検証材料となるものである。よって、本の内容を正しく捉え、評価する上でも重要である。

### 三、料紙とは

料紙とは、表紙以外の、本の中身（本文・序跋等）の紙を指す。これもまた、年代・生産地・どのような内容の古典籍に使用されているか等で性質が異なる。

名称については、一般に①何を材料としているか（楮紙・雁皮紙〈斐紙〉・三桠紙・斐楮混ぜ漉きなど）、②産地はどこか（美濃紙・越前紙・杉原紙）、③見た目の印象（鳥の子紙〈鳥の卵に由来〉）などによって呼称され、書誌情報等において紙質を指す際にもこれらが適宜使用されている（これらの呼称は現在生産・販売されている和紙についても使用されているが、必ずしも同質・同製法とはいえない）。

紙の質を向上させるために、繊維や増粘剤のほかになたな材料を添加した紙も存在する。斐紙に泥土の粒子を混ぜて漉いた間合紙（泥間合紙）や、米澱粉粒を大量に添加した紙などがこれにあたる。また、漉いた紙の表面を平滑にするための加工を施した紙（打ち紙）も、紙質の向上を目的としたものである。

また、宿紙・漉き返し紙などと呼ばれる、一度使用した紙を再び材料の一部として使用した、今でいうリサイクルペーパーにあたる紙も古典籍に利用されている。それらは、時代や使用された古典籍の性質により、品質等が大きく異なる。

### 四、装訂から情報を得る際の留意点（近世期板本を例に）

先述の通り、装訂は資料の年代判定を行う上で重要な拠りどころとなりうる要素である。なかでも、近世期における書物問屋および地本問屋による出板活動は、商品として書籍を作製し販売する恒常的な経済活動の中で扱われたため、一定の法則性が認められることが多い。そのため、作品の成立の時期等を判定する際に有力な根拠となる。ただし、当時の実態に即した順当な評価をする上で、以下のような点に注意する必要がある。

① 装訂が完備されていない資料を範囲外としてしまうこと

- ② 初印本と後印本の認定や扱い（同一の板木を利用した、異なる時期に行われた出板活動を検討材料に入れるか否か）
- ③ 後補された別本を流用した装訂によって、資料評価を誤ること（明らかな改装本でない、「良さそうな」装訂を伴った資料の存在）

#### 五、料紙から情報を得る際の留意点（近世期板本を例に）

料紙は基本的に古典籍の中身（本文）と離れ離れにならないものである点で、資料を評価する上で重要な拠りどころとなる要素である。先述の通り、年代や生産地などで紙質が異なると見込まれるため、長期間に亘って印刷・販売を繰り返したものに関しては、印刷情報からは出てこない後印に関する新たな検証材料を得られる可能性を有している。

料紙に対して先学によって示された見解は、多くの資料に実際に触れ、研究過程上得られた知見を基としているため、浅学の者にとっては一部検証・確認し得ないものとなっている。また、機器を用いた観察・分析の結果を踏まえた先行研究についても、成果発表当時の機器の性能や、試料の扱い方や数、分析結果の理解の仕方などによって結果が異なる側面もある。

人の目や手による料紙観察と分析機器によるそれとを、それぞれ古典籍の正しい評価・理解を支える行為とするためには相応の注意を払う必要がある。

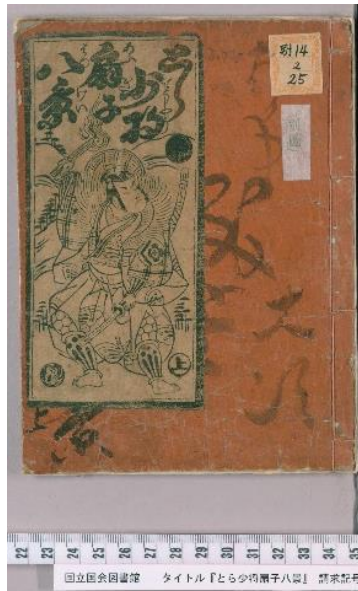
#### 参考文献

- ・国文学研究資料館電子資料室「和書のさまざま」
- ・『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999 年
- ・関義城『江戸東京紙漉史考』富山房、1943 年
- ・『書物學 19 紙のレンズから見た古典籍』勉誠出版、2022 年
- ・松原哲子「鱗形屋板絵外題考」『近世文藝』87、2008 年
- ・松原哲子「草双紙の本文料紙の紙質—高精細デジタル顕微鏡の観察結果を手掛かりに—」『近世文藝』117、2022 年

装訂が発信する情報、読み取れる情報

※草双紙の例

赤本



国立国会図書館蔵『とら少将扇子八景』

<https://doi.org/10.11501/2546774>

黒本



国文学研究資料館蔵『攀喰出生記』

<https://doi.org/10.20730/200016665>

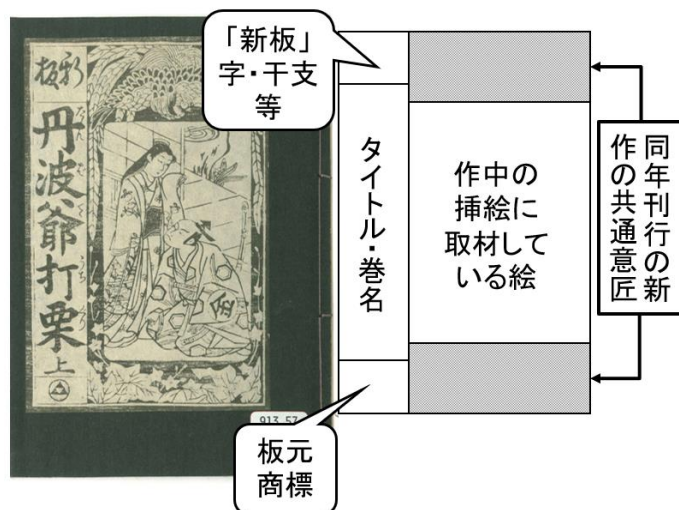
青本



国文学研究資料館蔵『色紙百人一首』

<https://doi.org/10.20730/200011822>

- ① 中本 (約 18cm×13cm)・丁数 (基本 5 丁 1 冊)・江戸の生産＝草双紙
- ② 表紙の色・デザイン＝赤本・黒本青本・黄表紙・合巻の別＝年代分類・ジャンル分け
- ③ 題籤中の商標・意匠＝板元名・刊行年 (干支由来の情報があれば)



問 1

国文学研究資料館蔵『攀喰出生記』の装訂で留意すべき点は？

複製日本古典文学館、日本古典文学会編、ほるぷ出版、1979 年

問2 以下に示す草双紙は『<sup>はんかいしゅつしょうき</sup>攀嚙出生記』と『<sup>いろがみひやくにんしゅ</sup>色紙百人一首』のどちらの仲間とするのが妥当か？



国文学研究資料館蔵

『<sup>うたがるたのはじまり</sup>続松紀原』 <https://doi.org/10.20730/200012536>



『大東急記念文庫善本叢刊』

近世篇 4、汲古書院、1976 年

料紙の質（仕上がり）を決める要素

※高精細デジタル顕微鏡による観察を踏まえて

キーエンス社

VHX-8000



【1】何を材料としたか

評価方法・繊維そのものの特徴から判断

・植物由来の<sup>きょうざつぶつ</sup>夾雑物から判断



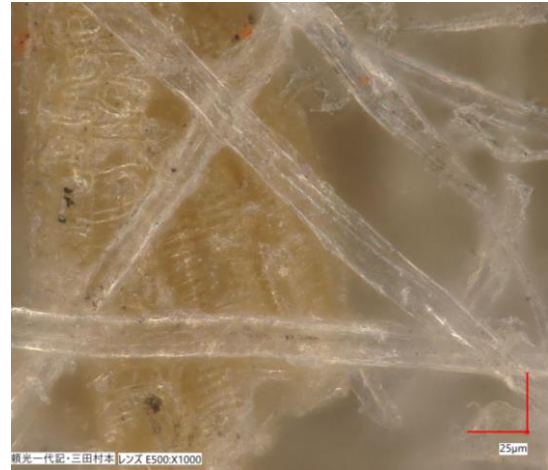
国文学研究資料館蔵

『いろはたんか』

<https://doi.org/10.20730/200016816>

【例】楮<sup>じんぴ</sup>の靱皮



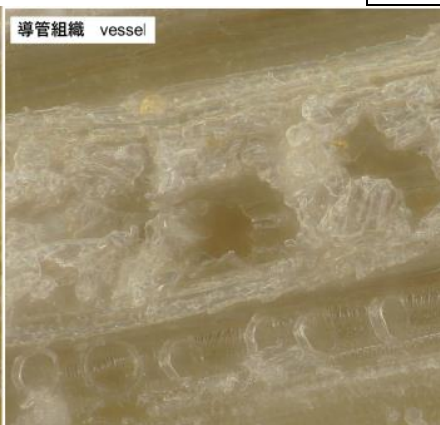


【例】 稲の導管

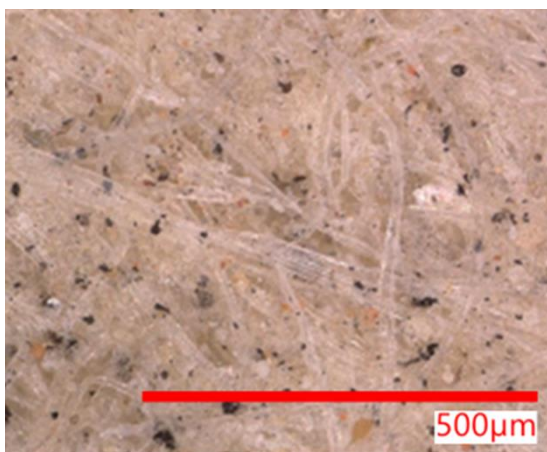
国文学研究資料館蔵『頼光一代記』

<https://doi.org/10.20730/200019978>

参考：稲わら観察画像

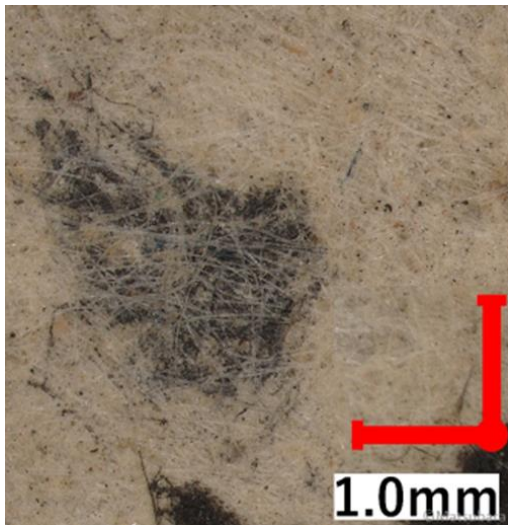


・漉き返し紙（反古を材料の一部としている紙）である証拠



墨点の点在

- ・繊維同士の絡まり合いの内側に点在している。
- ・肉眼で見て、白く、きれいに見える紙に存在する場合もある。



墨付き繊維群の漉き込み

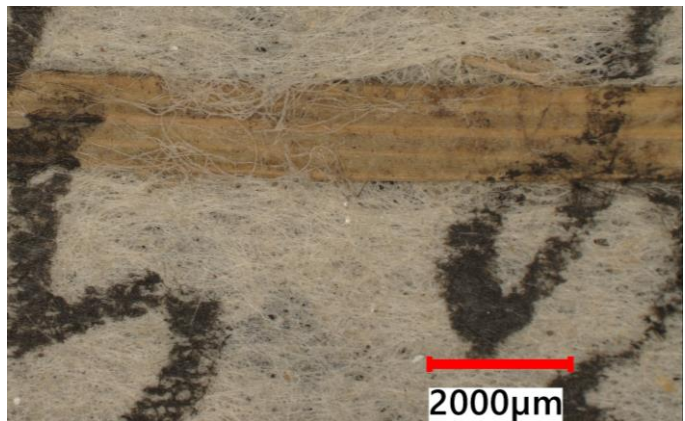
- ・黒いエリアの上に、漉いた紙の繊維の絡まり合いが確認される。
- ・肉眼では汚れに見えるが、そうではない。

## 【2】どれだけ丁寧に処理をしたか・しなかったか

- ・目視で確認できる稲わら片



架蔵本『たるほかい日高川』(『ふたえおび ひ だかがわ 蕨 帯日高川』)

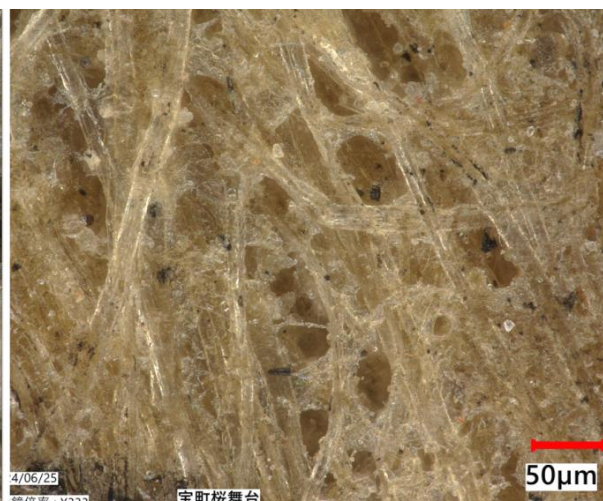




- ・ 反古の漉き込み



架蔵本『宝町桜舞台』（狂言絵尽）



国文学研究資料館蔵『四天王国めぐり』 <https://doi.org/10.20730/200019979>



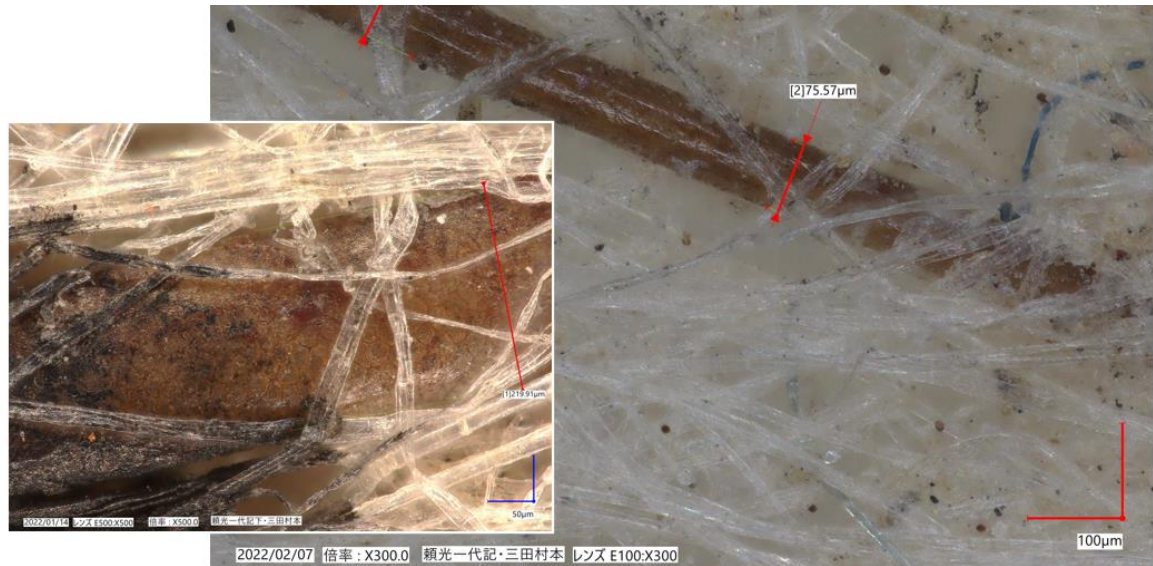
### 問 3

『四天王国めぐり』の紙片の漉き込みは摺りの仕上がりにはどのような影響を与えているか？



・そのほかの処理の程度の判定材料 雑多な夾雑物

- 植物片 生漉きの紙にも確認される。混入の程度で処理の精度を評価できる可能性あり。
- 毛髪 紙漉き工程中の混入、<sup>ほづ</sup>反古の使用等、複数の要因が考えられる。種類も色々ある様子。位置・長さ・末端の形状等に留意する。



色付きの繊維 抜きんでて青色が多い。赤色系統は退色したようにみえる例が多い。ほか、染色・着色したというより、変色したようにみえるものがある。

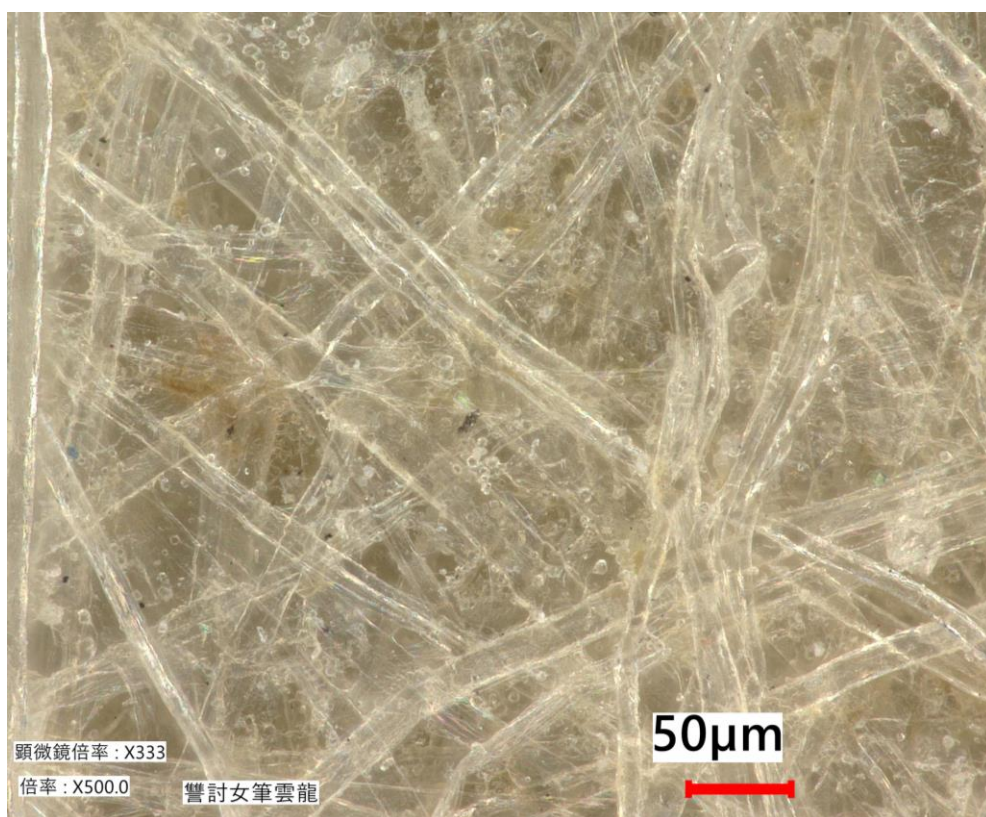
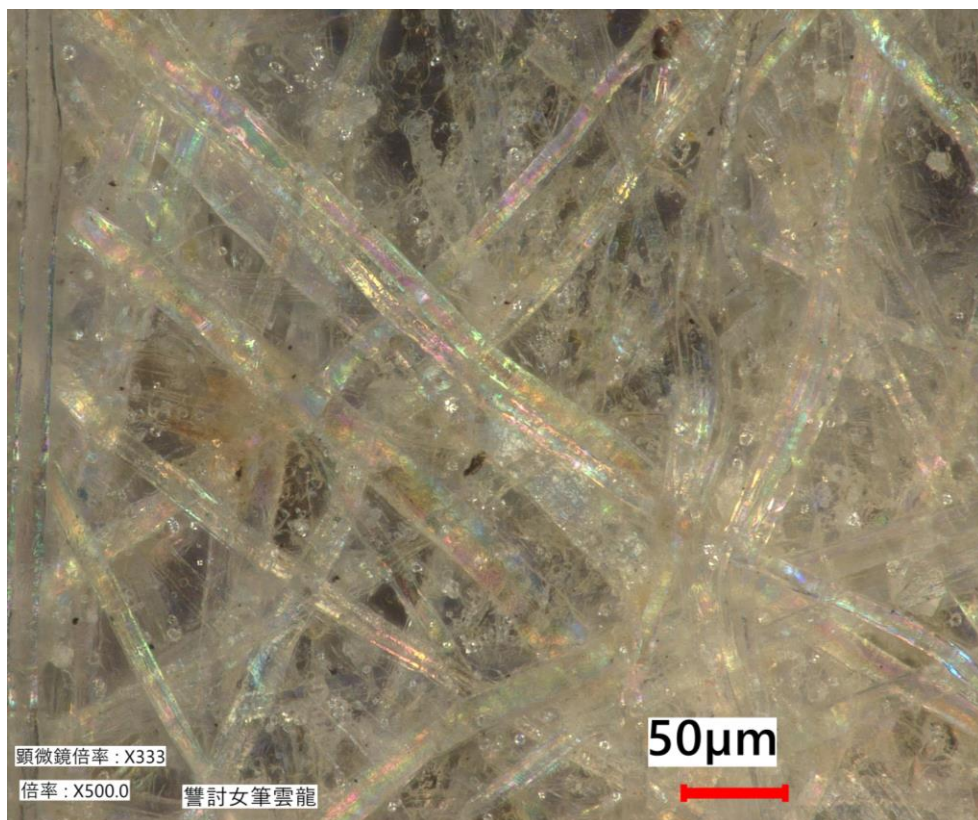
墨付きの繊維群 繊維の表面に墨粒がまぶし付けたように付着したものが一群となって漉き込まれている。

墨点 表面に付着しているのか、繊維同士の絡まり合いの内側に点在しているかで意味が異なる。

紙片 反古の処理が十分でなかった場合、その破片がそのまま、あるいは<sup>こうかい</sup>叩解・<sup>だつぽく</sup>脱墨処理が中途なままで漉き込まれたとみられる。漉き返し紙であることの確かな証拠。

【3】紙質を良くするための特別な手を加えたか 【例】米澱粉粒の添加





個人蔵『讐討女筆雲龍』

問 4 この紙は漉き返しか、漉き返しでないか？

- 問 1 板元商標がない（書名の下）。初摺本を刊行した板元とは異なる板元による後印本であることを意味する。
- 問 2 『色紙百人一首』。二枚題簽のうちの絵題簽が残存する黒本体裁。青本の後摺として世に出た黒本と判断される。
- 問 3 漉き込まれた反古のアウトラインに沿って、印刷に乱れ（空白）が生じている。
- 問 4 漉き返しではない。墨点がごくわずかしかな確認されず、かつ表面にしかないため。

↑

答え